

名探偵コナンの脚本家としても知られるミステリー作家の辻真先（つじ まさき）さんが、8月15日の終戦記念日の朝日新聞朝刊でインタビューに答えた記事が掲載されました。その中で、辻さんは「戦争に反対だ」と言うよりは、「戦争は嫌だと言いつける」ことが、戦争をさせない土壤へ養分を入れていくことになると言っていました。1932年生まれの子さんは、自分たちが戦争を体験した最後の世代だという認識を持っていて、「いったん戦争の木が育ち始めたら、いくら反戦を叫んでも間に合わないんですよ。木が生えてくる前の土壤に、とにかく戦争は嫌なんだという「厭戦」（えんせん）の養分を入れていくしかない」と言っていました。厭戦という字は、「厭わない」とか「厭世的」の「厭」で、厭戦とは、戦うことを嫌うという意味です。私たちは毎年8月には過去の戦争を振り返りながら、平和な社会を作り出すことを誓うのです。

オリンピックで活躍された卓球の早田ひな選手が、帰国した際に、行きたいところとして、アンパンマンミュージアムと知覧の特攻平和祈念館をあげましたが、アンパンマンの作者であるやなせたかしさん弟さんが特攻で亡くなっていることを早田ひな選手が知っていて、両方の名前を挙げたのかなと、私は思わされて、そういう意味でアンパンマンを見ると、アンパンマンの漫画には敗戦後に飢えた子供たちを助けたいという隠された意味があることを改めて思わされて、そういう意味でも早田選手の発言に感激したのです。

さらに、辻さんは「一人でも反戦の旗を振るのは立派かもしれないけれど、後ろを見ると誰もいないということになりかねない。厭戦という土壤がないと、反戦という花は咲かないんじゃないか。それでも、たいていの場合はあだ花に終わるかもしれないが」と語っています。厭戦<sup>1</sup> 1  
と言うと、消極的に聞こえるかもしれませんが、昭和16年の日本で「戦争は嫌だ」とはまず言えなかったわけです。そして、辻さんは「いつ戦争が始まるかわからない時代というのは、コップに水がギリギリまで注がれているような状態でしょう。水をもう一滴垂らせば、あふれて戦争になるかもしれない。厭戦というのは、その最後の一滴にならないことだと思っただけです。だから、「戦争は嫌だと言いつけることで、コップから水があふれるのを延ばすことができるかもしれない」。いつの間にか戦後が戦前になっていく可能性がある今のこの日本で、戦争は嫌だと言いつけることで、戦争が始まるのを防ぐことにつながるのではないかという希望を辻さんは持っているのです。辻さんは名探偵コナンの脚本の他にも鉄腕アトム<sup>2</sup>の脚本をこれまでたくさん書いてこられました。ですから、第二世界大戦中のアメリカで、ディズニーの人気キャラクターを使った戦意高揚のアニメが作られたことに触れて、アニメや漫画が愛国教育に使われて、子どもたちに「戦争は正義だ」と思わせることだっただけであり得ることを憂慮されていました。

現在、日本では自民党の総裁選挙が連日テレビや新聞で報道されていますが、その出馬表明をしている人たちの戦争に対する考えを見ると、確かに他国による国境侵犯があることを考えれば、国防に対するタカ派的な言動が目立ちますが、戦争をどのように防ぐかを考えている方がいいことに気づかされます。確かに、武力には武力で対抗するしかないと考えるのはわかりやすいものです。けれども、アニメや漫画の戦争ヒーローもののように、自分目線の正義のヒーローが描くような戦争論を脱却していかないように感じてしまうのです。結局は、自分たちが悪い相手を懲らしめなければ、自分たちが敗けてしまうという単純な戦争理解が頭の中にあるようにしか見えなからいので。戦争を防ぐために、外交努力など、使える手段は何でも利用して防ぐという考え方が見えてこ

ないのです。

さて、イエスの時代もユダヤ人社会はローマ帝国軍によって支配されていましたし、実際に紀元66年にはローマ軍とのユダヤ戦争が勃発しています。紀元70年にはエルサレム神殿がローマ軍によって破壊されています。ですから、ユダヤ教社会はローマの圧政から自分たちユダヤ人を解放してくれるメシアの登場を願望していました。その思いがイエスを神の子として正しく理解することを難しくさせたために、イエスに対して無理解な弟子たちや民衆を創り出してしまったのです。

ですから、そのようなユダヤ教社会のメシア願望を反映した考えを持っていたファリサイ派の人はイエスに対して言うのです。13節『あなたは自分について証しをしている。その証しは真実ではない』と言うのです。これに対してイエスは14節で『たとえわたしが自分について証しをするとしても、その証しは真実である』と反論したうえで、『自分がどこから来たのか、そしてどこへ行くのか、わたしは知っているからだ。しかし、あなたたちは、わたしがどこから来てどこへ行くのか、知らない』(14節)と言うのです。ここで、「イエスがどこから来て、どこへ行くのか、知らない」と言うイエスの言葉は、直接的にはイエスが父なる神のもとから来て、また神のもとへ帰っていくという意味ですが、当時のユダヤ教社会がローマ帝国に支配されていることを鑑みることになれば、イエスはローマ帝国と対峙して戦争をすることを避ける意味で、この言葉を語っていることに気づかされます。辻さんに引き付けてみるならば、厭戦しているからこそ、戦いを望んでいない平和の神の意志のもとから自分が来ていて、再び、自分は神のもとに帰っていくということを表明しているのです。これは、12節で『わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ』と言っていたことを受けたもので、戦争ではなく平和があるからこそ、イエスは世の光として人々に救いの道を指し示すことができたのです。戦争ではなく、平和があるからこそ人々は暗闇の中を歩むことなく、人間の命を輝き照らす光を持つことができるのです。

イエスが世の光であるというのは、戦争という暗闇の社会を作らないという私たち信者の決意なしには、言い表すことはできません。命を国のためにささげることが愛国の基であると考えられることは平和は作りだすことはできません。しばしば靖国神社への参拝が、日本国のために命をささげた人がいたから、今の日本の平和があるという論理で語られるところがあるのですが、逆に言えば、国のために命をささげることが強要されて命を失った人たちに対する責任として、平和を創り出す責任が私たちにあるのだと考えるのでは雲泥の差があるのです。

三浦綾子さんと三浦光世さん夫妻のあるエピソードがあります。三浦さん夫妻は医療費もかかるために、二人で小さな雑貨店を開きました。お客さんが多くなると、向いに同じような雑貨店ができました。ところが、三浦さんの店はうまくいくのですが、向いの店はどちらかと言うと閑散としています。そこである時、夫の光世さんが綾子さんに言います。「あの家は学校に通う子供たちもいて、いろいろとお金もかかるだろう。商売がうまくいっていないようだから、私たちが少し助けてあげよう」。一体どういう意味かと綾子さんが尋ねると、光世さんは「私たちの店の物を少し減らして、お客さんがその物が欲しいと言ったら、あの店に行つて買うように勧めてみたらどうだろう」と答えたそうです。光世さんの言うとおりにすると、向いの店の商売がうまくいくようになり、逆に綾子さんに時間的な余裕ができるようになり、そのおかげで朝日新聞の一千万円懸賞小説「氷点」を書くことができたのです。光世さんの名前は世の光を逆に並べたものです。私の授洗牧師が旭川六条教会から転任してきた牧師なので、三浦綾子さんの話はいろいろと聞くことができましたのですが、その時はなかなか三浦光世さんのような発想はできないと思いました。けれども、そのような発想ができることが自分の周りの人たちに命の光をもたらす存在となることができ、そのことを覚えたいと思います。